近代中国の女性洋画家関紫蘭と中川紀元

九州大学大学院人文科学府博士後期課程　武　梦茹

関紫蘭（Guan Zilan, 1903-1985）は 1920～30 年代の上海で活動し、印象派やフォーヴィスムを思わせる作品を描いた女性洋画家として知られる。2012 年に関紫蘭の遺族によって現存する関紫蘭の絵画や写真を紹介した画集が出版されたことで研究の基礎が整ったが、彼女の作品が生成されたプロセスを当時の時代背景に即して検討するような研究は行われていない。2016 年に、関紫蘭の個展（1930 年、上海）で発行された目録が発見されたことで、従来知られていない女性像の存在が明らかとなった。筆者は別稿で、この関紫蘭個展の目録に掲載された《少女》と《毛扇》が、1930 年に中川紀元が関紫蘭のアトリエを訪れた際に、彼女をモデルに描いた《緑衣》とその妹を描いた《毛扇》と酷似していることを指摘し、中川の制作経緯や二科展に出品した意図を考察した。（「近代中国の女性洋画家関紫蘭と中川紀元―中国服の女性像を中心に」『デ アルテ』36 号、九州藝術学会、2020 年）それを踏まえて、本発表は関紫蘭がどのように中川紀元の《緑衣》《毛扇》を受容し、《少女》《毛扇》を描いたのかを検討することが目的である。そこで、関紫蘭の《少女》《毛扇》の制作過程、中川の作品を参照した動機、作品に見られる彼女の表現の独自性を明らかにしたい。

発表ではまず、関紫蘭の《少女》《毛扇》と中川紀元の《緑衣》《毛扇》を比較し、類似点と相違点を整理する。そして、河野道房による中国絵画史における模写の概念の変遷に関する研究に基づいて、これらの作品を「創造的模倣」という観点から考察する。さらに 1920 年代に関紫蘭が師事した洋画家、陳抱一の写生と模写に対する考えに照らして、関紫蘭が中川の《緑衣》《毛扇》の表現様式を模倣しつつ、そこに描かれた光景を再現し、実物を観察ながら《少女》《毛扇》を描いたという可能性を提示する。

次に、関紫蘭が中川紀元の女性像の表現様式を模倣した動機を明らかにするために、彼女が 1920 年代に描いた女性像の表現を分析する。そこで、彼女が師事したもう一人の洋画家、丁衍庸による女性像の表現を関紫蘭が取り入れていたこと、そのような行為が師の画風の忠実な継承として評価される一方、剽窃という批判もあったことに着目する。このような状況下で、関紫蘭は丁衍庸の様式を脱却し、新しい女性像の表現を獲得することを目指していたことが考えられる。そして、1930 年に自らのアトリエで中川が制作した《緑衣》《毛扇》を部分的に模倣することで、関紫蘭はとりわけ新しい顔貌表現を学ぼうとしたことを指摘する。

それでは、関紫蘭の《少女》《毛扇》における独自性とは何であろうか。実は、関紫蘭は女性を表象する上で、絵画だけではなく写真にも強い関心を持っており、女性像を描く際には、写真館で撮影された自らの写真からも着想を得ていたのである。1920 年代に関紫蘭が描いた女性像や写真と比較することで、1930 年の《少女》《毛扇》には、写真イメージに対する志向と、空間表現における平面性や衣装の装飾的表現の追求といった意識が認められることを指摘し、ここに中川とは異なる彼女の固有性があると結論付ける。